

翻訳という世界



船越 隆子

翻訳家

を付ける作業は、いつも悩ましい。

先日、テレビで「アイ・アム・レジエント」という映画を見た。治療薬に使ったウイルスが突然変異を起

最近の映画は、そのまま片仮名にする傾向にあるようだ。英語が身近になってきたせいもあるだろう。昔

が、生き残った科学者が血清を作り出し、最後はそれを守るために爆死。彼のおかげで人類は救われたというストーリー。

インターネットで調べていると、主人公は死んでしまったのだから「私」でなく「彼」が伝説になったの

である。でもそれならおそろしく邦題はそのまま片仮名にしたらどうか。邦題と

「アイ・アム…」で「アイ・イズ…」ではちょっと弱い。きついまったく別の題名になったのではな

か、あるいはまったく違う邦題にするか。

その中で出てきたのが「タ光の中でダンス」だった。本の中で、母親がダンスを踊るわけでもないし、クラ



船越さんが翻訳した本と原書。原題とまったく別のタイトルを付けることも少なくない

直訳せず印象で勝負

〈8〉

タイトルの付け方

「タ光」は、どうして「タ日」じゃないんですか、ともよく聞かれる。正直に言ってしまうと、特に理由はない。けれども、輝きつつ沈んでいく人生を表すものたち。米国のファルがその後押しをしている。光」という文字

「アイ・アム…」で「アイ・イズ…」ではちょっと弱い。きついまったく別の題名になったのではな

短い中にも思いが詰まる

「光」という文字が、あいに日本では公開されなかった。しかし昨年、本とDVDが同時に発売された。映画は、人気俳優たちが出演しカンヌ映画祭に出品されて話題になったを、という意味もあった

(徳島市在住)